

平成24(2012)年11月24日(土)14時、19時半

犬上南組法城寺様報恩講出講ご縁

聞其名号の救い

Ver. 5

浄土真宗本願寺派布教使 堅田 玄宥

# 犬上南組法城寺様報恩講出講法話構成

## 1. [日程]平成24年11月24日

大逮夜14時勤行、ご法話 14時40分から前座40分、中休み、後座60分

お初夜19時半から初夜礼讃、ご伝承下巻、御法話は20時50分から60分

## 2. コンテンツ構想

### 1) 大逮夜「聞其名号の救い」

1) 世俗化 (Securalisation) の時代の伝道教学の確立と伝道方法……………40分

2) 仏教讃歌の部「お東のご遠忌ソングーなんまんだぶつの子守歌」……………5分

3) 平成24年11月第2号「聞其名号の救い」……………50分

### 2) 御初夜「妙好人にお育てに与るまで」

1) 平成24年10月第2号「嬉しいことも悲しいことも如来様のお手まわし」…40分

2) 仏教讃歌の部「のんのさま&聲 名(となへませ)」……………20分

二番に則して、称名のいわれをご案内

# ご讚題『親鸞聖人御消息』

Ref 『親鸞聖人御消息』註釈版聖典P785、宗祖讚仰作法 音楽法要宗祖御消息拝読の御文

- 弥陀の本願とまふすは、名号をととなへんものをば極楽へむかへんと誓はせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり。

# みちゆき

- 此の度のご縁を戴きますまでには長い間のお育てがあったことでございます。
- 前住和上様、唯今のご住職和上様のお育てを有り難く振り返ることあります。
- 今から二十年近く前、愛糠会のご縁を戴きました。その思い出の中から……
- 「私の口をついて出て下さるお念仏は諸仏如来の名号讃嘆のお声と何ら区別がありません」。
- あるとき、愛糠会(二水会)のご講義の合間に瓜生津先生からひとりごとのようにお聞かせ戴いたお言葉です。
- 私は、ハッとしました。
- あるとき、御講義が終って失礼する間に
- 「お念仏は法ですから」と私が申し上げると
- 「それでは行が教になってしまいます」とおっしゃったのです。
- これらは、浄土真宗の御法義の根幹をなす重要課題であります。

# はじめに

- はじめに
- 浄土真宗は、不可思議な宗教です。
- なぜなら、修行をするでない、学問を究めるでない、普通の日常生活を送っておいでのお同行が、お聴聞を重ねる中にいつしか如来様のお育てに会い、如来様のお慈悲をお慶びになる無数の方々がいらっしゃる。
- 妙好人と名の知れた人ばかりではありません。
- そこに親鸞聖人のみ教えの素晴らしさがあるのであり、真実である所以があると思われるのであります。
- そこで、本日前席では、初めにその秘密の鍵をお訪ねし、後席では、如来様のお育てに与って行かれたお同行の道行きとご讚嘆のお言葉を味わせて戴きたいと思うのであります。

# 世俗化(Secularisation)の時代に即応して

- 戦後、行政機能や医療が伝統宗教の枠組みから独立してしまうと宗教は無用ではないかと云われましたが、人々の精神の空白は満たされず新宗教や新々宗教が雨後のタケノコのように発生し、宗教の逆襲と言われるまでになりました。
- しかし、それらは、オーム真理教の例が物語るように社会的な不安定性を抱えています。
- 本来ならば、伝統宗教の僧侶が、使命感に支えられてお聴聞のご法座活動に情熱を燃やさねばなりません。
- 個々人が求める神秘主義や行動性に応える仕方で真実のみ教えが明らかにされねばなりません。「称えるお念仏」は、凡夫が如来様のお喚び声に遇わせて戴く実践活動であることをご法座活動を通してお伝えしていかなければなりません。
- 健全強固な地域コミュニティを育てる為に。

# なんまんだぶつの子守歌(お念仏)

1. なんまんだぶつ、なんまんだぶつ  
おじいちゃんのお念仏      お前は一人じゃないんだよ  
しんらんさまがいなさるよ      いまもしみじみ想いだす  
**おじいちゃんの子守歌(お念仏)**
2. なんまんだぶつ、なんまんだぶつ  
おばあちゃんのお念仏      いただきます、ありがとう  
わすれずおおきくなっとくれ      いまも心にうかびくる  
**おばあちゃんの子守歌(お念仏)**
3. なんまんだぶつ、なんまんだぶつ  
小さな子供と手をあわす      数えきれないひとたちに  
願われ生まれたお前だよ      いまもたしかに聞こえる  
**しんらんさまの子守歌(お念仏)**

# 聞其名号(聞名)の救い

- 聞其名号(聞名)の救い
- 浄土真宗は、聞其名号によって御救いに与るみ教えです。成就文に示されています。だから浄土真宗は、聞の宗教だと申します。
- それでは、「聞其名号」とは、何を聞くのでしょうか。
- 「十方恆沙の諸仏如来が無量寿仏の威神功德の不可思議なるを讃嘆なさる」その名号を聞くのだということが、直前の第十七願成就文によって判ります。諸仏如来のお一人がお釈迦様です。
- だからこの御讃嘆は、伝統的に「広讃」と申します。仏説無量寿経にお説き下さった仏徳讃嘆の一部始終だからです。
- 広讃の名号を聞くのだから、お名号の謂れを聞くことになります。
- 『一念多念文意(一多証文)』の第二文には、成就文のお謂れが親鸞聖人直々のお言葉として諄々と御説き下さっております(Ref註釈版聖典P677~679)。
- 前住和上様がご在世の頃、毎年の法城寺安居「大蔵会」には「浄土真宗の根本義」と題してそのお心を親しくお説き下さった。全国から参集されたお同行は、そのお言葉に感涙を落としたのであります。
- こうして仏教の伝統的な教行証の三法題で表したときの浄土真宗の「教」とは、聞其名号(聞名)による救いというみ教え(お法り)であることが判るのであります。



# 聞其名号は讚嘆門を通して齎される(1)

- 聞其名号は讚嘆門を通して齎される
- ところが、第十八願文には、聞其名号が直接誓われてあるわけではありません。
- 教行証の行として第十八願文に誓われてあるのは「乃至十念」であります。
- 善導大師、法然聖人は、第十八願を選択本願と明確にして下さったのですから、「乃至十念」が「選択本願の行」であることに疑いの余地はありません。因みに、「選択本願の行」は、法然聖人のお言葉であります。
- ところが、親鸞聖人が取願立法された教行信証の行巻の標挙は、第十八願の選択本願の行とせず、「諸仏称名の願(第十七願)」とあるのであります(尤も、選択本願の行、浄土真実の行という細注はあります)。
- これは一体どうしたことでありましょう。
- 親鸞聖人は、法然聖人のみ教えを受けつつ、天親菩薩の『浄土論』、曇鸞大師の『往生論註』を基礎に全く新しい教学体系を構築されたのでした。
- 選択本願の行の本質を曇鸞大師の論註を手掛りに他力回向にありと明らかにして下さったのです(Ref行巻冒頭「謹んで往相の回向を案ずるに大行あり、大信あり」)。

# 聞其名号は讚嘆門を通して齎される(2)

- 続いて出体積には「大行とはすなはち無礙光如来の名を称するなり」とあります。
- ここで、南無阿弥陀仏とおっしゃらずに、十字のお名号を引かれたその訳は、それが如実讚嘆の御文だからであります(Ref『浄土論』、『往生論註』)。
- これは名号の実義に契(かな)うてお讚え申す御文であります。
- 凡そ、名号の実義に契う仕方で如来のお徳をお讚え申す等ということは、凡夫にできることではありません。
- もしもそれができるとしたら、それは如来様から回向されたときだけであります。
- 出体積には主語が示されていません。と云うことは、如来様が行であり、その働いて下さる場が私である(私は催されて称える)と申すことができます。
- 言い換えれば、無礙光如来の名を称する口業そのものを如来様から賜ってあるということになります。
- これは、如来様の仰せの儘に無礙光如来の名を称しているのですからまことの信心を頂戴している姿だということができます。
- 信巻に出体積がないのは、疑いなく称名念仏している姿が実は信心の姿そのものだったからであります。

# 聞其名号は讚嘆門を通して齎される(3)

- 親鸞聖人は、まことの信心の人(他力の念佛者)を御消息で「真の仏弟子」とも「如来とひとし」とも「諸仏とひとし」ともお示しになりました。
- 真の仏弟子は、妙好人とも申し、正定聚の位に定まれるなりと仰ったのです
- ここで、如来と諸仏は、親鸞聖人におかれては同義語だと言われております。
- こうして如来様から回向された口業に催されて私の上で如実讚嘆する無碍光如来の名を称える行業(南無阿弥陀仏と称える行い(これを「略讚」と申します)は、その儘、諸仏如来が無量寿仏の威神功德をお讚えなさる行為そのものに通ずることが判ります。
- かくして行巻の標拳に「諸仏称名の願(第十七願)を掲げられた秘密の鍵は、讚嘆門の口業を衆生自身のプラクティスとして与えて聞名を確實ならしめるお手立てだったと頂戴できるのであります。
- 成就文で聞名を約束されているからであります。
- こうして仏教の伝統的な教行証の三法題で表したときの浄土真宗の「行」とは、無碍光如来の名を称する(南無阿弥陀仏と称える)大行であることが知られます。

## 聞其名号は讚嘆門を通して齎される(4)

- 本願力廻向の口業ならばこそ、仰せに従ってこれを行わずに、聞こえて下さる南無阿弥陀仏のお徳(本願招喚の勅命)によって衆生(私)は、漸く迷妄の夢の中から喚び覚まされることになるのであります。
- 親鸞聖人が、「帰命尽十方無礙光如来」と申すは、「帰命」は南無なり、また、帰命と申すは如来の勅命にしたがふところなり。「尽十方無礙光如来」と申すはすなはち阿弥陀如来なり」と押さえて(Ref『銘文本』註釈版P651)、
- 「南無阿弥陀仏をとなふるは佛をほめたてまつるになるとなり」と仰せになったのもまことに旨なるかなと頂戴できるのであります(Ref『銘文本』註釈版P655)。合掌

# ご讃題『浄土和讃』讃阿弥陀仏偈和讃25番

Ref『宗祖讃仰作法』第4首

- 十方諸有の衆生は
- 阿弥陀至徳の御名をきき
- 眞実信心いたりなば
- おほきに所聞を慶喜せん
  - (Ref『浄土和讃』讃阿弥陀仏偈和讃25番 註釈版P560)
- 本願成就文のお心は、このご和讃に凝縮されています。

# 妙好人「木下マサ」

(Ref 鈴木大拙『妙好人』、瓜生津隆真「信心と念佛」  
P52)

- 一切善悪の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、
- 仏、廣大勝解のひととのたまへり。この人を分陀利華と名づく(正信偈)

木下マサ (昭和60年1月94歳で御往生)

- 何が出てきても放っとけ放っとけ
- そのままそのままのおことばだなあ
- とてもやない、ありがたいこと、ありがとうございます
- これはみな親さまのお仕事
- ありがたいなあ、ありがとうございます。

# 妙好人としてお育てに与る過程を訪ねて

- 妙好人の逸話をお聞かせに与るとどこか私達と別次元の人のように思いがちであります。
- しかし、自分たちと寸分変わらぬ煩惱具足の凡夫が、如来様のお育てに与って行かれる。
- その課程をお訪ねすることがそのまま私達がこれからお育てに与って行く道行きとなるのではありますまいか。
- 小林一茶の辿った人生の道行をお訪ねすることは、その意味で極めて大きな意義があると窺われます。

# 小林一茶の俳句(その1)

Ref)平成24年10月14日蓮照寺親鸞聖人七百五十回忌大遠忌  
りびんぐらいぶず平成24年10月第2号

- われと来て 遊べや親の ないすずめ、
- やせ蛙 まけるな一茶 これにあり
- ふるさとや寄るもさはるも茨(バラ)の花 初七日の後には仙六との遺産相続争いが待っていた。
- 大の字に 寝て涼しさよ 寂しさよ 五十二歳で初めて二十八歳の菊さんという嫁を迎えます。
- はえわらえ 二つになるぞ けさからは

一句は、長女さとが誕生した翌年の正月の句であります。このとき、おらが春という一文を残しています。一茶が、仏壇の鐘を鳴らすと、どこにいても、さとが急いで這って来て、早蕨(さわらび)のような小さな手を合わせて「なんむ、なんむ」と称えます。土徳に育まれつつあった一茶の家族のあり様が余すところなく伝わって参る一句であります。ところが、そのさとが六月二十一日の朝、疱瘡で一年一カ月の生涯を閉じてしまいます。母は、死に顔にすがってよよよよとなくも、術もありません。



# 小林一茶の俳句(その2)

- 露の世は 露の世ながら さりながら
- この世は露のように儚いものだとは聞き知ってはいても、愛し子の場合は格別です。あの「さと」がなくなっていくとは辛いなあと吐露するのであります。
- ところが、「さりながら」の一言には辛いばかりではなく、実はもう一つ、深い如来様のお慈悲のお心が広がって居て下さるように思われてなりません。
- 妙好人源左同行に「ようこそ、ようこそ」というお言葉があります。これは、私のような愚かな者の口から尊いお念仏が出て下さる。なんと有り難いことよのうと一足飛びに頂戴しがちですが、実はそうではないと和上様から窺わせて戴きました。
- というのは、この言葉は、悲しいこと、辛いことに遇ったときにもおっしゃっている。また「ようこそ、ようこそ」だけでは終わっていない。その後「さても、さても」という言葉が続いているのだとおっしゃるのです。「さても、さても」は、土地の言葉で「なんというすばらしいことであろうか」という感嘆詞だそうです。
- してみれば、一茶にあっても、嬉しいことも、悲しいことも遥かな昔から働いて居て下さった如来様のお手まわしだったか、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と戴いていらしかったことかと窺われます。これは、機の深信に支えられて如来様のお慈悲を喜ばれているお姿だと言わねばなりません。

# 小林一茶の俳句(その3)

- **ともかくも あなたまかせの 年の暮**

さがなくなった年の暮れに詠まれた一句であります。「あなた」とは、他ならぬ阿弥陀如来様であります。三人目の石太郎は、首が据わらぬうちに、母親の背に負われていて窒息死します。一月十一日の出来事です。

- **もういちど せめてめをあけ 雑煮膳**

- **かげろうや めにつきまとう 笑い顔**

石太郎を失ったときの一句であります。そういう一茶が、やがて六十五歳で終焉を迎えます。

- **としもはや あなかしこなり 如来さま**

最晩年の一句であります。「阿弥陀様に全てをお任せしてこの世を終わらせて戴きますよ」というご本願に任せ切った心境が謳いあげられてあります。

物の本には、一茶は、恵まれない淋しい晩年を送られたと書かれています。

なるほど、一般の人の目にはそう映るかもしれませんが、実は、一茶は、浄土真宗のお育てに遇い、御安心の中で往生して行かれたことが知られるのであります。合掌

# のんのさま

1. のんのんのんの のんのさま (凡例:○は一拍あけます)

このこのいのち まもりゃんせ

このこのあした まもりゃんせ

このこのみらい まもりゃんせ

2. のんのんのんの のんのさま

このこのともだち まもりゃんせ

このこの地球 まもりゃんせ

このこのゆめを ○まもりゃんせ

3. ななつのうみに はしかけて

せかいをつなごう てをつなご

はしははしでも にじのはし

せかいのこどもが あそぶはし

# 聲 名 (となえませ)

1. なもあみだぶつ なもあみだ (凡例: ○は一拍あけます)

なもあみだぶと となえませ

なもあみだぶと たたえませ

なもあみだぶと きかしゃんせ

2. なもあみだぶつ なもあみだ

なもあみだぶと はかりませ

なもあみだぶと たのまんせ

なもあみだぶと ○めざめませ

3. ななつのうみに はしかけて

せかいにつなごう みだのはし

はしははしでも ろくじばし

みだのじょうどに わたるはし

# “となえませ”のその訳

- なむあみだぶと称える行いは、如来様から聞名を確實ならしめる行いとして他力回向して下さった行業だと窺われます。口業は、讚嘆門の行業だったからです。
- 如来様から回向して下さったお名号をお称えする行為なのですから、およそほめ過ぎもせずほめ足りないこともなく、ぴったりと讚歎できることになります。
- かくしてなむあみだぶつと讚嘆すれば、間髪をいれず南無阿弥陀仏のお名号が聞こえて下さいます。
- 聞こえて下さったお名号こそは、たった今し方お浄土を発し、わが両の耳を揺るがせ、私の胸底に届いて下さった本願招喚の勅命そのものでありました。
- “はかる”とは、お名号をはかりの基準にして生きる事であります。これまで私の欲望を基準に生きて来たこの私が、この世は虚仮不実、如来様の仰せこそまこととお名号を生きる基準にさせて戴くことになるのです。
- タノムとは、お任せすること、如来様の仰せにお任せして生きることです。仰せにおまかせするとき、今生の夢の中にまどろんできた私も、漸くにして勅命に喚び覚まされるのでありました。
- こうして、如来様の命がわが胸底に宿って下さったその日から、人生の道行がどんなに厳しかろうとも、如来様の智慧の光に導かれて、私は人生の白道を歩み始めることになるのでありました。
- そのとき、既に私は如来様のお慈悲に包まれていることが判るのであります。摂取不捨の利益に与ったからです。
- “となえませ”のその訳、行巻の標拳として親鸞聖人が何故に「諸仏称名の願」と十七願を掲げて下さったのかのその訳は、聞名を確實ならしめる如来様のお手立てだったと頂戴できることであります。